|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 課題名 | 期間 | 目的**令和2年度　完了課題について** | 内容 | 成果の要約 |
| 密播苗を用いた水稲の省力・低コスト栽培技術の確立 | H30～R2 | 山梨県内の水稲産地では大規模化、高齢化に対応した省力・低コスト栽培技術の確立が求められている。特に、育苗センターなどでは委託の増加に伴い育苗箱数が増加しており、施設の能力を超えるとともに、育苗から移植の春作業で過密日程となっている。　そこで、単位面積あたりの育苗箱数を削減できる高密度播種栽培技術に着目し、本県の水稲品種に適した栽培技術を確立する。 | １．主要品種の高密度播種育苗技術確立　(１)品種別育苗期の生育特性の把握　(２)品種や育苗方法毎に適した育苗条件　(３)温度による育苗期間の把握２．高密度播種対応・非対応田植機の移植　　　技術　(１)非対応田植機における適正播種量　(２)高密度播苗移植における最適な栽植密度３．疎植栽培と組み合わせた栽培技術　(１)高密度播種苗と疎植栽培による実証 | 水稲産地の大規模化・省力化を目標とした育苗箱数の削減化技術について試験を実施し、高密度播種苗の疎植栽培技術が確立できたため課題を完了とする。　　　　　　　　　次の成果情報として取りまとめた。 ・「育苗箱数を半減できる水稲高密度播種苗の疎植栽培」（R2成果情報） |
| スイートコーンの生産拡大に向けた新作型の開発 | H29～R2 | 山梨県のスイートコーン生産は、ハウス、二重トンネル、一重トンネル、露地と連続的に行われているが、秋期の出荷は行われていない。　そこで、本県スイートコーンの生産量を拡大するために、秋期に出荷できる抑制作型について平坦地、高冷地でそれぞれ検討し、作期拡大技術を確立する。　また、抑制作型は生育期が台風発生期と重なるため、強風による倒伏軽減を図るための管理技術として雄穂切除の効果について明らかにする。 | １．抑制栽培による新作型の開発　　　　　　　　　　　（平坦地、高冷地）　(１)秋期出荷のための抑制栽培技術　　・播種時期と収穫期、適品種、施肥量　(２)同一マルチによる複数作型技術　　・緩効性肥料の種類、施肥量２．労力軽減化技術の確立　(１)播種管理技術　　・出芽率向上対策、間引き作業軽減化　(２)無除防栽培技術の検討３．安定生産技術の確立　(１)倒伏軽減対策技術　　・雄穂切除の効果、切除の時期・位置　(２)高温、乾燥対策技術 | 県産主力品目、スイートコーンの作期拡大を目標とした栽培技術について取り組み、秋出し可能な露地抑制栽培の新作型技術を確立できたため課題を完了とする。　次の成果情報として取りまとめた。・「平坦地におけるスイートコーンの抑制栽培」（R1成果情報）・「平坦地のスイートコーンの抑制栽培における施肥基準量」（R1成果情報）・「富士北麓地域におけるスイートコーンの抑制作型の確立」（R1成果情報）・「富士北麓地域における夏どりブロッコリーと抑制スイートコーンの2毛作」（R2成果情報）・「スイートコーン栽培における雄穂切除による倒伏軽減技術」（R2成果情報） |
| 課題名 | 期間 | 目的 | 内容 | 成果の要約 |
| トマトの茎葉残さ処理を組み合わせた土壌還元消毒技術の確立 | H30～R2 | 山梨県の施設トマト産地では黄化葉巻病が多発し問題となっている。本病の媒介虫であるタバココナジラミがウイルスを保持した状態で 施設外に飛散し被害の拡大を招いている。　そこで、トマト茎葉残さすき込み処理を組み合わせた土壌還元消毒を行うことで、コナジラミ類の施設内での死滅を図るとともに、土壌害虫や残さを介して伝染する各種病害に対する効果を検討する。また、還元資材として投入する有機物による肥料効果を明らかにする。 | １．病害虫への防除効果の検証　【現地試験】　(１)残渣すき込みにおける問題点の抽出　(２)タバココナジラミの封じ込め効果　(３)ネコブセンチュウへの防除効果　　【場内試験】　(１)各種土壌病害虫への防除効果検証　(２)投入資材の検討（ふすま、米ぬか）２．作物残さの養分利用と土壌化学性検証　(１)トマト残さと米ぬかによる窒素供給量　(２)減肥による後作トマトの収量性 | トマト黄化葉巻病の防除を目標としたトマト茎葉残さと米ぬかによる土壌還元消毒技術について確立し、実証できたため課題を完了とする。　次の成果情報として取りまとめた。・「トマト茎葉残さすき込み処理を組み合わせた土壌還元消毒による病害虫防除」（R2成果情報）・「トマト茎葉残さと米ぬかを組み合わせた土壌還元消毒による窒素肥料効果」（R2成果情報） |
| 高冷地における夏秋パプリカの生産安定技術の確立 | H30～R2 | 収穫や調製作業に労力がかからないパプリカは、果菜類の新たな品目として有望である。　そこで、本県高冷地における夏秋パプリカの有望品種選定や仕立て・整枝法など、無加温パイプハウス栽培における栽培技術を確立する。 | １．夏秋パプリカの適品種選定　　　　　　（無加温パイプハウス栽培）　(１)果色が赤色、黄色、橙色　　・オランダ、国産品種（中～大果系）２．栽培技術の確立　(１)仕立て・誘引・整枝方法と栽植密度　　・主枝の仕立て本数と最適な株間間隔　　・側枝の処理、誘引、摘葉など整枝法　　・施肥やかん水など肥培管理法３．簡易雨除け栽培の検証　(１)栽培適性や収穫時期、収量性 | 高冷地の新品目として夏秋パプリカの栽培技術確立に取り組み、果色が赤・黄色の有望品種や、最適な主枝の仕立て本数や整枝方法など、無加温パイプハウスでの栽培技術を体系化することができたため、課題を完了とする。　次の成果情報として取りまとめた。・「高冷地における夏秋パプリカの有望品種および栽培法」（R1成果情報） |